

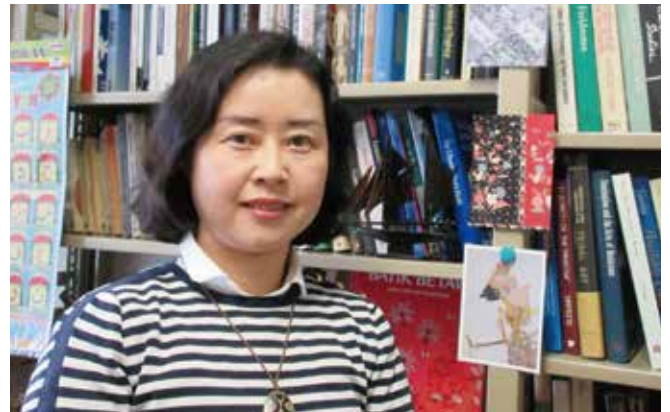
そこに生きる人々の「声」を聴き、 インドネシアの歴史や文化をより深く広く探求する。

① 国家と社会編成の歴史的事実研究として 評価され受賞。

私は、インドネシアが中央集権体制から民主化・地方分権化に大きく舵を切った1999年から、東部の海域社会に赴き、歴史と文化をめぐる動態について社会人類学的に研究してきました。人々が、日常生活の中で遠い王国時代の出来事を昨日のこのように生き活きと語り、出身集団間で語りのパターンに異同があることなどに興味を持ち、語られる過去の歴史と語り手が属する現在、その現在を形作る多層的な歴史過程の関連について、人類学と歴史学を接合した方法で探求しました。それらをまとめた民族誌が、東南アジアの東部島嶼部の国家・社会編成の歴史的事実を捕捉する希少な地域研究として評価され、三島海雲學術賞特別賞を受賞しました。

② それぞれに語られる「生きている過去」から、 人々の豊かな生に迫る。

フィールドワークは私の研究活動の原点で、そこで起きていること、抱いた疑問などが研究テーマとなっています。最近では、従来の歴史への関心を敷衍させ、インドネシアの近現代にフォーカスしたテーマも探求しています。具体的には、1965年のクーデターの後、全国に波及した、政府当局による市民に対する逮捕、拷問、虐殺などの集団的暴力についてです。私の調査地にも被害者は多数いらっしゃり、当事者やご家族からお話を伺っています。人々が受けた暴力の経験は、50年以上の時を経てなお、ありありとよみがえる「生きている過去」です。ところがインタビューではしばしば、暴力に屈しなかった自身の姿や、家族との心温まるエピソード、さらには遠い過去の王国時代の栄華が長時間、熱く語られることがあります。語りを



◆第1回・2012年度特別賞受賞 人文科学部門

山口 裕子

北九州市立大学文学部 教授(2020年4月より)

※受賞時：一橋大学大学院社会学研究科 特別研究員

《受賞研究》インドネシア・ブトン社会における歴史語りの社会人類学的研究

とおして人々は、「暴力の被害者」というアイデンティティから自らを解放し、尊厳を回復しようとするかのようです。一連の出来事は、インドネシア近現代史の最大の分水嶺であり、その実相を探求していくことはインドネシア史研究の最重要課題の一つです。他方で、暴力に収斂されない語りにも注目しながら、暴力一色では決して描きつくることができない、人々の豊かな生に丹念に迫っていくことが目下の課題です。

③ 現代インドネシアと日本、 人やものの流れと文化的他者との共生。

もう一つのテーマは、日本に暮らすインドネシア人コミュニティへの関心を発展させたものです。特に日本に在留する外国人イスラム教徒の暮らしと日本の産業界でのハラール(イスラム法上許された)食品の流通、そして日本に技能実習生として在留したインドネシア人が祖国に帰還した後で、地元の若者を日本に送り出す「同胞リクルート」の動向を追いかけています。いずれもグローバル化における人やものの流れと、文化的他者との共生が研究関心の根底にあります。今般の感染症問題は、世界的な人口移動に影響をもたらし、これまで短期のローテーション労働力として外国人を受け入れてきた日本社会の在り方にも再考を迫るものとなるでしょう。こうした、メゾ・マクロの動向も視野に、今後も継続してこれらのテーマで考究したいと思っています。